神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Disaster by Mimesis : On Under Western Eyes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 御輿, 哲也, Ogoshi, Tetsuya メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1663

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

擬態の悲劇

——『西欧の目の下に』試論——

御輿哲也

Let be be finale of seem.
—— Wallace Stevens

(1)

コンラッドが，母国語のポーランド語でもフランス語でもなく，なぜ英語で作品を書き続けたのかについて，自らざっくばらんにその理由を語ってみせた『個人的な記録』(*A Personal Record*) の序文の一節は，一般によく知られたものである。以前，その話題をめぐって友人の Hugh Clifford と交わした会話を思い出しながら，彼は次のように述べている。

> My recollection of what I meant to say is: that *had I been under the necessity* of making a choice between the two〔= English and French〕, and though I knew French fairly well and was familiar with it from infancy, I would have been afraid to attempt expression in a language so perfectly "crystallized". This, I believe, was the word I used.(1)

「ざっくばらんに」と述べたが，少なからず言い訳めいた口調の混じるこの一節が，「彼は意図的に英語を選択したのだ」という，Clifford の広めた（らしい）噂に反駁するという目的を裏にもっている以上，多くの作家の打ち明け話がそうであるように，自らの心理についてのある種の意識的粉飾がほどこされている可能性はかなり高い。

もちろんフランス語が "crystallized" にすぎるという表現は，それを，

あまりにも明晰で精神の淀みを容易に許容しないものという意味に解してよいのなら，確かにさもありなんと思わせる。だが，それならなぜ英語なのか。英語の方が，本質的にルーズで柔軟，文法的にも融通無碍だから，と言うのならまだわかる。しかし，コンラッドが挙げてみせる理由は，それとは全く異なっている。先の引用に続けていわく，「私の英語力は，他の種々の適性と同様，生まれつきのものだった」（“as natural as any other aptitude”）。さらには，自分が英語を選んだというより，「私の方が英語に選ばれた」（“it was I who was adopted”）に等しいとまで言うのだが，これでは説得力を云々する以前に，そもそも説明の体をなしてはいまい。20年近くに及ぶイギリス船との長く深いつき合い，念願だったイギリス国籍の獲得やイギリス女性との結婚，そして最後にカンタベリーに文字どおり骨を埋めるに至るまでの，彼のイギリスびいきの真相は，むしろ「説明しようのないもの」として，こっそり葬り去られようとしている。

あるいは，それでよいのかもしれない。すでに故国からのやましくないとは言えない“jump”に身を委ねた亡命作家にとって，使用言語の選択について釈明を求められることほど苦々しい苦痛を伴う体験も少ないはずで，もっともらしく響くまことしやかな解説口調にだけは陥るまいとする作家的矜持を考慮に入れれば，まともな説明が与えられないのは，むしろ当然と見なすべきだろう。しかし，それでもなお，小論でこの「言語選択」の問題にこだわってみようとするのは，コンラッド晩年の傑作で，年代的にも『個人的な記録』と重なり合う『西欧の目の下に』（*Under Western Eyes*）の中に登場するある人物——「語学教師」を自称し，異文化の中で翻弄される自らの体験を異様なほどに語りたがる，あの匿名のイギリス人の語り手がもつ，ある不透明な存在感の意味を，少し突っ込んで考えてみたいからである。

（2）

この語学教師の語り手は，西欧人である自分にとって，主人公ラズーモフ

の「裏切り」の舞台となるロシアの風土や慣習は，徹頭徹尾理解をこばむ神秘的な存在でしかないという感想を，再三再四口にする。そのくせ一方では“cynical”という便利な言葉をキャッチフレーズのように振りかざして，ロシア人の心性や態度を強引に要約してみせようともする。たとえば「ロシアの精神は，苦悩にぶつかると，ひそかに自らを卑しめようとする点で冷笑主義的だ」（“...in the secret readiness to abase itself in suffering, the spirit of Russia is the spirit of cynicism.”(p.105)[2]）と言い，ロシア人には「ナイーヴで絶望的な冷笑主義を神秘めかした言葉つきでくるみ込む，恐るべき腐食性の愚直さ」（“a terrible corroding simplicity in which mystic phrases clothe a naive and hopeless cynicism”(p.134)）があるとも述べる。そこには西欧の，いわゆる「先進国」の文化に属する者としての，突きつめれば根拠は曖昧なはずの優越感がほの見えるようにも思われるが，いずれにしても，この語り手の冗漫な長口舌には，常にこうした好んで矛盾をかかえこもうとするような，一種のうさん臭さが漂っている。そしてそれは，物語の冒頭で触れられる，決して彼の脳裏を去らないという「言語不信」の思いについても，そのまま当てはまることだろう。

> Words, as is well known, are the great foes of reality. I have been for many years a teacher of languages. It is an occupation which at length becomes fatal to whatever share of imagination, observation, and insight an ordinary person may be heir to...What must remain striking to a teacher of languages is the Russians' extraordinary love of words...; they are always ready to pour them out by the hour or by the night with an enthusiasm, a sweeping abundance, with such an aptness of application sometimes that, as in the case of very accomplished parrots, one can't defend oneself from the suspicion that they really understand what they say. (pp.55-6)

よく論じられるとおり，この小説では「信頼」，「裏切り」，「正義」といった

言葉の不確かさないしは空虚さが，ドラマ展開の重要な鍵をにぎっている。実際誰が誰を「信頼」し，誰がどのように「裏切って」いるのかを，根本的に問い直し始めると，事実上収拾がつかなくなるだろう。こうして物語全体が，言葉のはらむ本質的な曖昧さや欺きやすさに，積極的にかかわろうとしているのである以上，すでに事件の一部始終を知る語り手が，最初から言葉の危険に言及すること自体に，きわだった不自然さがあるわけではない。

だが，大胆に決めつけるような口調と，自信なげにおずおずと語る口調が混在し，他人への皮肉と自らへの嘲笑が微妙に呼応し合うこの語り手の言葉づかいは，やはり最後まで胡乱に響くことをやめない。そもそもどれほど言葉の無力を言い募ろうと，おそらく今なお生計をたて，老残の身を長らえさせるために，この教師は「言葉」の力を借りて，それこそ「見事に訓練された鸚鵡たち」を再生産することに，日々余念がないはずである。それが不本意な身過ぎ世過ぎの手段であろうと，「それでも言葉には人を慰める力もあるはずだ」(p.56) との妥協的な信念によるものであろうと，われわれ読者としては，「言葉を信じない」と公言しつつ，当の「言葉」を生業とし，とりとめのない自他の言葉の洪水に進んで身をまかせようとするこの老人の，ほとんど道化じみてさえいる姿勢に，小さからぬ驚きと戸惑いを感じずにはいられない。

少々突飛な連想かもしれないが，ここで思い出されるのは，「闇の奥」(“Heart of Darkness”) に登場する，ひとりのロシア人である。“harlequin” とあだ名され，おおむね沈黙したままのクルツの傍らにあって，あたかもその沈黙をかばうかのように，無益で脈絡の乏しいおしゃべりにふけり続ける，例の従順なロシア青年のことである。あの，ひたむきには違いない匿名の青年に，ヨーロッパ近代精神の苦渋を凝縮したようなクルツの思いが，ほんのわずかでも理解できていたかどうかは，実はきわめて疑わしい。確かなことは，彼の饒舌が，クルツを理解しようとする読者のまなざしの前に，語り手マーロウとはまた別様の「壁」を築き上げていることだろう。それは確かに

目ざわりな障害物に他ならないのだが，その壁の，いかにも間に合わせの「目隠し」にも似た粗末な造作を眺めているうちに，奇妙にクルツが卑近で色あせた存在に感じられ始めるのもまた，事実である。道化じみたロシア人の軽薄で無根拠な振舞いは，クルツ自身のかかえる悲惨にして滑稽な道化性を，的確にえぐり出してみせているのだろう。

もちろん，同じことがそのまま老語学教師にも当てはまるとは思えない。同じ「軽薄」という形容辞をあてがうにしても，青年と老人とでは，その意味するところも及ぼす力も大きく異なるはずだ。しかし，ことさら不体裁な「壁」を築き，塗りかためることに専念する年老いた語り手を，ほぼ全編にわたって介在させたことに，作者の慎重な計算があったことは疑いようがない。この無気味な存在感をもつ語り手の果たす役割について，Mark A. Wollaeger は，次のように述べている。

> Later, writing his journal (destined to be read by the narrator), Razumov describes the language teacher explicitly as the demonic author posited less directly by *Nostromo*: "Could he have been the devil himself in the shape of an old Englishman?" In the teacher of languages Conrad found the kind of narrator whose complex relationship with the protagonist generates the dialogic interest once associated with Marlow.(3)

つまり，語学教師のラズーモフに寄せる多分にお節介な配慮に対しては，たとえば『ロード・ジム』(*Lord Jim*) の語り手のマーロウが，客気にはやる青年ジムの行動に向けた，少なからず自負心と老婆心の入り混じった視線を重ね合わせてみることができよう，というのである。むろん，この二人の語り手の人柄は，大きく距たってはいる。誠実で慎重居士のマーロウと，一貫して軽薄と無理解を装うかに見える語学教師の間には，雲泥の差がある。のみならずジムがマーロウを "demonic author" だなどと感じたことも，お

そらく一度もないだろう。しかしその一方で，ジムの人生に干渉し，一旦はその苦悩する精神を救い上げながら，最終的には彼の早すぎる死を呼び寄せることにもなったマーロウには，存外，「悪魔的な作者」という呼称がよく似合うのかもしれない。いわんや，登場人物のほとんどが「言葉」の世界に溺れ埋もれていくかのような，いわば「言葉」の専制支配に屈した観のある『西欧の目の下に』の時空間の中で，匿名の語り手が，もう一人の言葉の操り手である作者と取り結ぶ「悪魔的な」関係は，ある意味では一目瞭然あからさまなものであるだけに，かえって不吉で不可解な通奏低音をかなでているようにも思われてくる。もう少し，この作品での言葉の跳梁ぶりを追いかけてみることにしよう。

（3）

登場人物が次々と「言葉」の世界に溺れていくと言っても，当然その埋没のしかたはさまざまで，一様ではない。ただそのことは，言葉の多様な可能性や豊かな生産性を証しだてるものではなく，むしろそこで決定的ないし致命的な役割を演ずる「言葉」は，決まって異様にのっぺりとして無個性なもので，しかもなお，有無を言わさぬ支配力と拘束力を帯びたものとして姿を現わしている。

たとえば，何人かの主要な登場人物は，明らかに自らが手にする一見何でもない「言葉」によって，翻弄され苛なまれ，迷路に追い込まれて我を忘れたり，ついにはその運命をねじ曲げられたりさえする。それは，「信用」という有難くもないレッテルを，革命家ハルディンに一方的に貼りつけられたラズーモフに始まって，そのハルディンの「けがれなく高潔で孤独な存在」（“unstained, lofty, and solitary existence”（p.159 他））というラズーモフ評を額面通り，いやそれ以上の価値をもつものと受け取ってしまった妹ナターリア，あるいは盲目的でも散文的でもある革命運動に否定的なラズーモフのなぐり書きに，強い関心を寄せたミクーリン顧問官や，同じく彼の自暴

自棄にも聞こえる苛立ちの表明を，類まれな「誠実」の現われと見る革命家のソフィア・アントノーヴナに至るまで，程度や質の差はあれ，ほとんど変わりなく言えることである。そして，この種の取り違えの滑稽なほどの重大さに，一番敏感であらざるをえなかったのは，言うまでもなくラズーモフ自身であろう。

> A mysterious connection! Ha! ha!...He had been made a personage without knowing anything about it. How that wretch Haldin must have talked about him! Yet it was very likely that Haldin had said very little. The fellow's casual utterances were caught up and treasured and pondered over by all these imbeciles. And was not all secretly revolutionary action based upon folly, self-deception, and lies? (p.117)

描出話法の奥から，低く鈍く響いてくるラズーモフのひきつったような笑いには，「間違いの喜劇」(“comedy of errors” (p.274)) の主人公に仕立て上げられた自らへの，苦い戸惑いと暗い焦燥が入り混じっている。こうした理不尽な運命に直面した彼にとって，亡命革命家に対するスパイの密命を帯びてのロシア脱出行が，ただの「見せかけの遊戯」(“a game of make-believe” (p.297)) に見えたとしても，あるいはハルディンの寄せる信頼が「あの男自身の幻想が勝手に生んだもの」(“what his own illusions suggested” (p.336)) としか映らなかったとしても，何らあやしむに足りまい。ラズーモフは，自らのアイデンティティなるものが，内省によって確立され克己によって維持される堅固な実体などではなく，所詮は「自分が他人にどう見えるか」というレッテルづけの問題，つまりは他人のもたらす場当たり的で予測不可能なイメージの乱雑な集積にすぎないものであることを，徐々に思い知らされていく。

しかし，ここでもう一歩踏み込んで考えてみると，そもそもラズーモフは，当初の希望どおり懸賞論文で「銀メダル」を獲得し，帝政ロシアの体制の一

端をになう大学教授となることで，本当に自らのアイデンティティが確立されると信じていたのだろうか。革命運動の欺瞞的体質を鋭く見抜く目をもっていた（ないしはその程度には鮮明な政治的意識のあった）彼が，世紀転換期のロシアを支配していた独裁体制の残酷に盲目であったはずはない。とすれば，保守派知識人の隊列に伍することが，彼の衷心からの夢の実現につながったとは到底思えない。「論文」を書く行為とは，あえて言えば，他に自己確立の道をもてず，確かな身よりもつてもない孤立無援の青年が，止むをえず選び取ってみせた，一応体制を支えるかのように見える立場，いわば擬態のアイデンティティの構築であったとしか考えられないはずである。体制にも反体制にも本来の足がかりをもたず，何の保証も手応えもない空虚な幻影に身を托そうとする態度を貫くこと——それが，彼に残された唯一の選択肢だったのだろう。

もしそうであるのなら，ハルディンへの冷酷とも見える「裏切り」の後に，ラズーモフが身を寄せることになる不本意なスパイとしての立場が，それ以前に彼が身をおいていた立場と，その曖昧さや危うさにおいて，さほど大きく隔たったところにあるとは思われない。最初から彼に許されていたのは，実体の伴わない身ぶり，何者かであろうとする不確かな演技，つまりは砂をかむように不毛な，ある種の「擬態」でしかなかったのではないか。ラズーモフが，論文であれ当局への報告書であれ，個人的な手記であれ恋人への手紙であれ，いつもことさらに他人との直接的なコミュニケーションを拒否し，時にはそれを攪乱さえするような「書き言葉」の世界に，自ら埋没していったように見えるのも，けだし無理からぬことだろう。(4)

そのように考えると，今度は一見ラズーモフとは正反対の位置にいる一人の人物のことが，気になり始める。それは，ロシア官憲によるシベリア流刑の憂き目を見ながら，からくも果敢な脱走に成功し，その波乱に富んだ半生の冒険譚を大仰な自叙伝にまとめることで，一躍亡命革命家仲間の寵児に成り上がったピーター・イワノヴィッチである。どこか「書く」という作業に

取り憑かれ，「書くこと」を自らのわずかな拠り所にしているかのような風情は，この二人の意外な共通点として指摘できることだろう。もちろん，読者の心理を巧妙に操作し，ひたすら大衆受けを狙ったピーターのこれ見よがしに仰山な言葉と，あくまで自省的に自らの足場を踏みかためようとしたラズーモフの手記の言葉の間には，歴然たる距離がある。しかし面白くもあり，無気味でもあるのは，ピーターの大言壮語が，実は神経質なまでに内省的で綿密な計算の上にこそ成り立っていたように，ラズーモフの自己分析の背後にも，必ずしも是認されがたい自尊心や名誉欲が見え隠れしているという点で，つまり二人をへだてているはずの距離の実体は，しばしばその姿をくらましかねない気配なのである。そこにコンラッド一流の，いささか底意地の悪い揶揄や，醒めた現実認識を見てとることは容易であろう。

ラズーモフの手記が綴られ始めた時期は定かでないが，少なくとも「想像力の欠如」を自認する語り手が，一巻の書物にまとめうるくらいの，微に入り細をうがった膨大な分量の内面の記録であったことは間違いあるまい。また付添婦テクラの話を通して伝わってくるピーターの口述筆記における，まるで一言一言吟味しつくすような神経症的なこだわりは，「言葉に取り憑かれた」という常套的な形容を色あせさせるほどの圧倒的な迫力をもっている。この二人の異様な没頭ぶりを見ていると，そこでは自分の文章を紡ぎ出すことで，他ならぬ自分自身を説得すること――「言葉」によって自身の心理を操り，方向づけ，ついには自らを籠絡することさえ，目指されているように思われてくる。と言っても，二人が「言葉」の力を無邪気に信じていたというわけではあるまい。むしろ，ある意図のもとに，徹底して信じるふりがなされ，好んで言葉の信奉という擬態が演じられていたと言うべきか。

その結果，それぞれの実体がどれほど不分明であろうと，いや不分明であるからこそ，二人の人物は「言葉」によって生かされると同時に，どこかで「言葉」を隠れ蓑にして，「言葉」の陰に身をひそめているような印象が濃厚となる。もとより二人の肉体が人目を免れていたわけではなく，ラズーモフ

は，ジュネーヴの革命家たちの間に，その蹌踉として青ざめた姿を頻繁に現わしているし，ピーターも，その見苦しい「毛むくじゃらの肉の塊」を，たえず仲間の前にさらし続けている。しかし，それでもピーターは所詮「あの自叙伝を書いた」有名人以上の存在ではありえないし，誰と話をしていても，目を落ち着きなく宙にさ迷わせるばかりのラズーモフの肉体的存在感も，きわめて希薄だと言わざるをえまい。

二人を特徴づけ，きわだたせているものは，公的であれ私的であれ，やはり彼らの言葉，とりわけ彼らの書き綴った文章以外にないのである。ある意味で，二人は「言葉」になりきっている，とさえ言えるのかもしれない。そしてそれが出来たのは，二人ともそれぞれ全く異なる事情から，いやでも言葉の本質的な不透明さ，欺瞞性を知り，そこに身をまかせることの陰湿な快感，絶妙の便宜を知りぬいてしまったからだろう。こうして，場合によっては自身をさえ瞞着しかねない「言葉」のおぞましくも無気味な姿が，作品全体のテーマとして，大きくクローズ・アップされ始めることになる。

（4）

一般的に言って，「言葉」とは，われわれに限りなく現実に接近することを許しつつ，ついに現実そのもの，対象それ自体に辿り着くことをかたく拒み続ける，あくまで両義的な存在であろう。われわれは，言葉を通して現実を見つめると同時に，言葉ではつかみようのない現実に，苛立ちを募らせもする。その限りにおいては，先に触れた語り手の「言葉は現実の大敵」という一見投げやりな台詞も，あるいはラズーモフが思い浮かべる「言葉はわれわれの思いを隠すためにこそある」（“speech has been given to us for the purpose of concealing our thoughts”（p.257））というひねった警句も，それなりに肯綮にあたっていると言えよう。しかしその一方で，何気ない言葉が見えないはずのものを見せ，思いがけない事態の一端を白日の下に曝すこともまた，間違いなく存在する。

たとえば，ひとつの比喩表現を取り上げてみたい。ラズーモフは，事実上の孤児という自らの境遇を強調する意味で，しばしば「自分には帰るべき家庭も炉端もなく」，あえて言えば「生気もなく冷えきって無反応な堅いロシアの大地」（“the hard ground of Russia, inanimate, cold, inert”（p.78））それ自体が自分の「家」だと述べているのだが，その屈折した孤独感は，ピーターの恩着せがましい饒舌への応答の中で，一種のクライマックスを迎えることになる。

> ‘...I have no father. So much the better. But I will tell you what: my mother’s grandfather was a peasant——a serf. See how much I am one of *you*. I don’t want any one to claim me. But Russia *can’t* disown me. She cannot!’
> Razumov struck his breast with his fist.
> ‘I am *it*!’（p.215）

「ぼくはロシアだ！」の一言には，ラズーモフの満腔の思いが込められている。なるほどそれは腹立ちまぎれに吐き捨てるように投げつけられた言葉なのだろうが，そこには否定しようとしてもしきれない，彼の故国への絶ちがたい愛着と幻想すれすれの希望が，わずかながら顔をのぞかせている。どれほどシニカルな仮面をかぶろうと，ラズーモフの心奥には，度しがたく夢想的な情熱と未練がましくないとは言えぬ執着が，出口を見出せぬまま，わだかまっていたと見なすべきなのだろう。

だが，もとより「ロシア」が，常に潜在的な希望の表象になりうるわけではない。一見いともたやすく，それは失意や絶望の象徴に反転する。物語の順序としては後になるが，タイムシフトがあるので実は時間を溯って，ラズーモフがまだペテルブルクに残っていた頃，ただ彼の不安と恐怖を煽るためだけのような，きわめて趣旨の曖昧なミクーリンの「尋問」を受けるのだが，その直後，ラズーモフの頭に浮かんだのも，「一面の雪におおわれた広大な

ロシアの平原」の寒々としたイメージだったという。

> But before he had got so far everything abandoned him —— hope, courege, belief in himself, trust in men. His heart had, as it were, suddenly emptied itself. It was no use struggling on. Rest, work, solitude, and, the frankness of intercourse with his kind were alike forbidden to him. Everything was gone. His existence was a great cold blank, something like the enormous plain of the whole of Russia levelled with snow and fading gradually on all sides into shadows and mists. (pp.288-9)

ここでも彼は，苦しまぎれに「ぼくはロシアそのものだ！」と叫ぶこともできたろう。けれども，その場合「ロシア」の一語がになう意味は，先の引用の場合とは全く異なった働き方をするはずだ。果てしない焦燥と無力さと虚脱感を言い表わすのに，ラズーモフが「ロシアの大地」の比喩しか思いつかなかったとすれば，一体彼にとって故国ロシアとは何であったのか，読者としてもあらためて問い直さざるをえなくなるだろう。

その答えは，簡単に出せそうもない。ただ言えることは，ラズーモフの紡ぎ出す「言葉」や「比喩」に頻繁に現われる揺れや矛盾が，彼の心の激しい動揺や戸惑いを，結果として支え，裏づけ，是認し，場合によっては煽り立てさえしているように思えるということである。「ロシア」という，それ自体は無色透明な言葉によって，彼は翻弄されつつ確かに救われてもいる。一見それは曖昧模糊とした「言葉」の陰に身を寄せ，身を隠そうとしたラズーモフの思惑どおりの事態のようにも見えるが，逆に言えば，その都度発せられる「言葉」こそが，彼のかかえる密かな不安や混乱を，まさにその曖昧さと不確実さのままに，情容赦なく表面に引きずり出しているということにもなろう。隠すはずのものがかえって暴きたてるに至るという逆説は，いかにもラズーモフのおかれた両義的な立場に似つかわしい。そこに浮かんでくる

のは，徹底した擬態によって自己の存在を宙づりにしようとして，結局はたがいに矛盾する思想やイデオロギーの断片を引きずりながら方向性を見失い，どうにも身動きがとれなくなった一人の若者の悲しくも滑稽な姿であろう。彼がハルディンの目に，絶対的に「孤独な存在」（“solitary existence”）に見えたのも無理はない。

身勝手なレッテルを貼りつけたとしてラズーモフの恨みをかうことになるハルディンも，この点については，すでに触れたとおり，彼の実態を恐ろしいほど正確に評価していた（「けがれなく高潔で孤独な存在」（p.159 他））。だがむしろここで問題とすべきなのは，この知的な革命家の遺したコメントが，その妹ナターリアに与えた芳しからぬ影響の方である。ナターリアは語り手に向かって，兄のコメントが，いかに激しく自分の胸を揺さぶったかを再三口にしている。確かに「けがれなく」や「高潔な」といった形容語が，教養がありプライドも高いが，世知に長けたとは言いがたい若い女性に，強く訴える力をもつのはよくわかる。しかし，なぜ彼女は，「孤独」という一語に限りなく魅了されるのか？

ナターリアが，いつしかラズーモフに，と言うより彼のかかえる悩みの謎めいた深さに惹かれていく気配を感じて，老語学教師は漠然とした懸念を示すのだが，それに答えて彼女は言う，「あの人の精神は将来を見すえているんです――闘争よりもずっと先の方を」（“‘His mind goes forward, far ahead of the struggle’”（p.210））。彼女が最愛の兄の先見性をラズーモフの精神に重ねて見ているのは，明らかだろう。だが「闘争よりも先のこと」とは，具体的に何を指すのか？さらに彼女は言葉を継いで，「あの非凡な人は，何か遠大な計画，偉大な企てを練っているに違いありません」（“‘I am convinced . . . that this extraordinary man is meditating some vast plan, some great undertaking’”）と述べるのだが，「遠大な計画」といい「偉大な企て」というのも，いかにも大風呂敷で意味不明だ。もちろんラズーモフのスパイ活動のことなど，この段階では知る由もない彼女の信じこみや

すさ，素朴さを，読者としては笑うこともできるし，あるいはそうすべきでもあるのだろう。けれども同時に彼女の態度には，現在の革命家仲間の組織的「闘争」や集団的「企て」に対して，どこか直観的にうそ寒く空しいものを感じ取っている形跡も見える。

ナターリアは，ある意味では「組織」の犠牲となった兄の死が，犬死にだったとは思いたくないし，思えるはずもない。保守派であれ革命派であれ，およそ人間の群れ集う組織が不可避的に身にまとう欺瞞的な暴力性や残忍さに対して，今の彼女は，いやでも過敏にならざるをえない立場にいる。そんな彼女に，亡くなった兄が自らの友人と見た人物への，最大限の羨望と渇望をこめて発した「孤独」の一語が，きわめて非現実的だからこそ，とりわけまばゆく重い意味をもつものに映ったとしても，何の不思議もあるまい。ナターリアにとって「孤独な存在」とは，いかなる状況下でもおのれの主張を曲げず，信念を貫く意志力をもった「独立独歩の」（“independent”）人物の謂いだったに違いない。それは，政治的ロマンティストとも言うべき兄と同じ血を分けもつ彼女が，必然的にかかえこんだ，危うい理想主義の残り火でもあったろう。

しかし，そうだとすれば，それはラズーモフにとっての「孤独な存在」——どこまでも政治や社会とは否定的・消極的にかかわり，演技と擬態に依存することを通してかろうじて維持されうる立場とは，いかに遠くへだたっていることか。その落差を知り，しかもそれを単なる「言葉」の取り違えの問題として片づけられないラズーモフ——もはや擬態の中に逃げこめなくなった，もとより現実の中に確かな足場をもてない青年は，当然悩み苦しむ。すでに述べたとおり，ナターリアは彼の悩みあえぐ姿に痛切な共感を寄せるのだが，むしろその「悩み」の過半は，彼女自身の思い入れがラズーモフに生み与えたものだったと言うべきだろう。[(5)] さらに，皮肉なことながら，結局ラズーモフは，「信用」や「裏切り」においてそうだったように，ここでも「孤独」という，自らそこに身をひそめようとした言葉そのものに，最後ま

で激しく翻弄され傷つけられ続けたことになる。彼が少なくとも一時的に「言葉」の呪縛を逃れるように見えるのは，書き綴ってきた手記の締め括りをなすナターリアに宛てた手紙の，やっと最後の一行にたどり着いたとき，つまり彼がこれ以上書くことの意味を見出せず，やむをえず筆を擱く瞬間のことである。そこには，こう記されている，「いや，確かにぼくは独立独歩です——だからこそ，破滅がぼくの運命なのです」（"'No! I am independent —— and therefore perdition is my lot!'" (p.333)）

（5）

こうしてラズーモフが「言葉」を放り出した後，それをいかにも物珍しそうな手つきで拾い上げてみせたのが，語り手の老語学教師だということになる。「物珍しそうに」と言うのは，最初に触れたとおり，彼が何度もロシア人気質の理解しがたさを強調する一方で，どこか子供が見慣れぬ小動物を玩ぶ時のような，無邪気な残酷さにも似た様子が，彼の態度に感じられるからである。この少々場違いにも見える「無邪気さ」の印象は，しかし，多少ともわざとらしく響く不協和音を奏でながら，読者の注意を喚起し続けずにはおかない。

そもそも自ら述べるとおり，ペテルブルクに生まれ，「9才の時を最後に町を離れる」（"having left it for good as a boy of nine" (p.198)）まで，そこに暮らしていたという語り手にとって，ロシアがただの「異国」でありえたはずはない。むしろ，それでも自らの「無知」を言い募る語り手の身ぶりが不可解に思えるくらいだが，その時その町で何が起こったのかは一切書かれていない。ちなみに，作者コンラッドが，逮捕された独立運動家の父とともに，家族ぐるみシベリア送りにされた後，心労の重なった母を病気で亡くし，やむなく伯父のもとに預けに出されたのが，ほぼ同じ8才6ヵ月の頃のことである。それは，自らの家庭が崩壊し，頼るべき共同体も失われ，彼が孤児同然の境遇におかれた年だと言ってもよいだろう。もちろん語り手は，

そのまま作者ではありえない。けれども，記憶の底にべっとりと貼りついたロシア語の重々しい響きは，ひょっとすると作者同様語り手にとっても，できれば思い起こしたくない過去の災厄の苦い刻印のようなものだったかもしれない。

Jeremy Hawthornは，このイギリス人であるはずの語り手の操る英語の文章が，しばしば生硬な翻訳調で綴られていて，異様にぎこちなく不自然に感じられる場合があることを指摘している。

> The teacher of language may be taking the conversation from Razumov's written account of it, but if so he is translating rather unidiomatically again. We are left with the feeling that the oddness is deliberate, either designed to attract our attention and remind us of the cultural gap between 'Western' readers and the Russian characters, or to highlight the act of translation as symbolic of the problems of conveying meaning in words.(6)

これまですでに幾編ものすぐれた英語の小説を書き上げている作者の語学的習熟度に問題があるはずもなく，従って「表現の奇妙さは故意に持ち込まれたものだ」というのは，その通りだろう。だがそれを，Hawthornのように，一般に「言葉で意味を伝えることの困難」を象徴する意匠であるとか，「『西欧人』の読者とロシア人の登場人物の間の文化的な溝を想起させるため」の技巧である，などと読むのは，無理に話を拡大し，焦点をぼやけさせるばかりではなかろうか。

もし「溝」があるとするなら，それは心の内部にこそあるはずだ。幼少期をロシアで過ごし，ロシアの空気に馴じんでいる隠れた語り手と，極力知らぬふりを装って，一見能天気に言葉をもてあそぶ，表面にしゃしゃり出た語り手の，その狭間にである。後者は，その言葉の洪水を通して，一貫して前者を抑圧し，隠蔽しようとするだろう。いや，それが憶測にすぎないという

のなら，「語り手」という語を「作者」に置き換えてもよい。どのみち，そこに投影されているのが，作者自身の出自と経歴をめぐる内面的葛藤であることに，疑いをはさむ余地はないはずだからである。ただ「隠すもの」は「顕わすもの」となり，隠蔽はやがて暴露に姿を変えること，すでにラズーモフの一件に見たとおりである。言葉は決して隠れ蓑とはならないし，傷口をいやす膏薬ともならない。遠ざけようとする気負いや忘れたいという焦燥は，かえってあぶり出しのように過去を浮き立たせ，言葉を「ぎこちなく不自然に」攪乱し，硬直させながら，果ては演技の不毛，擬態の貧困を，まざまざと思い知らせることになる。この「言葉」のはらむ豊饒なまでに入り組んだアイロニーに，作者がきわめて自覚的であったことについて，これ以上贅言を費やす必要はあるまい。

コンラッドは，生涯ほぼ一貫して英語で作品を書き続けた。やはりそれは，「英語」という，故国の苦々しい遠さを想起させる言語でなければならなかったのだろう。そこには何がしかの罪責の念とともに，心奥に眠るポーランドの原風景を記憶の底に単純に埋没させずにおくための，作者の懸命な，しかし幾重にも屈折した祈りがこめられていたに違いない。

〔注〕

(1) Joseph Conrad, *A Personal Record* (1912; J. M. Dent & Sons, 1975), p. V.

(2) テキストには，Joseph Conrad, *Under Western Eyes* (1911; Penguin, 1989) を用いた。以下は，本文中にページ数のみを示す。

(3) Mark A. Wollaeger, *Joseph Conrad and the Fictions of Skepticism* (Stanford University Press, 1990), p.179.

(4) この作品に「対話」的な関係が徹底して不在であることについては，たとえば，Aaron Fogel, *Coercion to Speak: Conrad's Poetics of Dialogue* (Harvard University Press, 1985) などを参照。

(5) ナターリアのひとりよがりの「信頼」は，兄の誤解の悲喜劇的な反復と言う以外あるまいが，ラズーモフ自身の態度に，事態の強迫的な反復を呼び寄せる素因があったのも確かだろう。

(6) Jeremy Hawthorn, *Joseph Conrad: Language and Fictional Self-Consciousness* (The University of Nebraska Press, 1979), p.125.